

平成 20 年度大学院修了式 学長告辞

本日、ここに多くの関係者の出席のもとに平成 20 年度香川大学大学院の修了式が行われることは我われにとって大きな喜びであります。大学院の博士後期・前期課程と修士課程の修了生、さらに論文博士の学位を授与された方の総数は 318 名であります。博士の学位を授与された 38 名、修士の学位を授与された 217 名、専門職学位を授与された 63 名の皆さん、ほんとうにおめでとうございます。心からお祝申し上げます。

修了生のなかには海外からの留学生 21 名も含まれています。留学生にとっては、日本の文化や習慣への適応という課題を乗り越えての成果であり、その努力は並大抵のものではなく、改めて祝意を表したいと思います。また、香川大学、愛媛大学、高知大学で構成する愛媛大学大学院連合農学研究科博士課程において、本学教員の指導を受けた 11 名に去る 3 月 18 日に博士の学位が授与されたことを申し添えておきます。

君たちの勉学と研究に対するたいへんな努力と熱意が大きな成果となって実を結んだことを君たちと共に喜びたいと思います。また、学生諸君の指導に温かい情熱を持って当たってこられた指導教員の方々に心から敬意を表します。

君たちは、2 年間または 3 年間、課程によっては 4 年間であり、また博士前期課程から数えれば 5 年間の人もいると思いますが、いずれにしてもかなりの年数にわたる研究活動の成果を学位論文などとしてまとめあげ、博士または修士、専門職学位という学位を手にすることができたわけであり、博士の学位は今や研究者の必携の資格になっています。また、自然科学系の分野においては、修士号の取得によって初めて専門性を主張できるとの認識もあります。本学における専門職学位は、地域の活性化・自立に資する教育の質を保証するものであります。

君たちが博士論文や修士論文としてまとめ上げた研究成果は君たちにとって大きな宝でしょうが、それ以上の大きな宝は学位論文をまとめる過程で培われた探究心、解析力、表現力、見識であり、さらには今後も継続して学習することの重要性であります。研究の過程で君たちが得たそのような能力を社会は求めており、君たちの力が科学技術や地域社会の明日を拓いてくれることを期待しております。

この 1 年間、いやこの半年間の間に日本はもとより世界の経済状況及び社会状況は劇的に変化したことは君たちも十分に承知のことです。就業や雇用の問題が世界中で大きく取り上げられていますが、地球温暖化に代表される地球環境の問題をはじめ、エネルギーや食料、水に関する問題は人類共通の課題としてきわめて重要なものであります。これらのなかで地球環境やエネルギー、食料の問題は日本ではしばしば取り上げられており、国民的関心も高いですが、水に関する問題は、日本が世界的に見れば水には恵まれた環境にあることから、あまり大きく取りあげられることは少ないように思われます。

21 世紀は「水の世紀」とも言われています。その言葉の出発になったのは、1995 年当時の世界銀行副総裁セラゲンディン氏の発言、「20 世紀の戦争が石油をめぐる戦いとすれば、21 世紀は水をめぐる争いの世紀になるだろう」と言われています。その後、世界における水不足、水汚染、水紛争などの水問題は深刻化し、国際的取り組みの必要性が認識されつつあります。

発展途上国を中心に水問題は深刻になっています。世界の人口約 68 億人の約 2 割の人々は、安全な飲み水が利用できない状態です。そして、人口増大や地球温暖化によって水不足、水汚染などの水問題はますます深刻になっています。一方、水には恵まれていると我われ日本人は思っていますが、そうでもなく、日本は世界の水を大量に消費していると考えられています。それを理解する鍵が「バーチャルウォーター（仮想水）」という概念です。バーチャルウォーター量とは、例えば日本でもしそれを作ったとしたら必要であったと推定される水の量です。牛丼 1 杯に 2 トンの水（ドラム缶 11 杯分）が必要となるそうです。牛肉 1kg を生産するのに必要な水はなんと 20 トン（ドラム缶 111 杯分）と考えられています。

食料自給率が低い日本は、食料輸入という形で大量のバーチャルウォーターを輸入していることになっています。世界の水を消費する日本は、世界の水問題にもっと積極的に貢献する必要を強く感じています。とりわけ香川県では湯水に対する意識が高く、私も大きな関心を持っています。

敢えて水問題を取り上げましたが、先ほど申し上げましたように、地球環境やエネルギー、食料も人類共通の課題であります。また、少子高齢化社会の進行によるさまざまな課題をはじめとする日本固有、地域固有の課題があります。そ

これらの課題や人類共通の課題に対して、解決の方向を示すのは、学術研究に関わる者の社会的使命のひとつであります。それら地球レベルや地域レベルの課題に新しい視点で挑戦し、解決の方法を提示できるのは君たち若者の特権であり、喜びであると思います。私は、君たちの新たな発想に基づくこれからの挑戦に大きな期待を持っています。

留学生諸君、君たちはこれまで君たち自身の言葉や行動を通して君たちの母国を日本に紹介していましたが、君たちが母国に帰国したら、君たちの言葉や行動を通して日本を母国に紹介してくれることを期待しています。そして、香川大学との共同研究や優秀な留学生の香川大学への派遣につながることを願っています。そして、君たちが日本と君たちの母国との交流のかけ橋になり、ひいては香川大学の国際交流に貢献してくれることを希望しています。

大学院修了生の諸君が本学を巣立った後も君たちに対してできる限り支援し、君たちとの交流を持ち続けたいと願っています。そのひとつとして、香川大学では2週間に1回の頻度で、「香川大学メールマガジン」を発行しています。そのなかには香川大学の近況や全学・大学院研究科の行事予定も掲載されています。もちろん、研究室の紹介も毎回あり、私も「オリーブの葉かげで」のコーナーで登場します。ぜひ定期購読者に登録し、香川大学との交流を継続してください。

大学院教育における国立大学の重要性はますます高まっています。香川大学が修了生の皆さんにとって、いつまでも誇るに足る大学であり続けるように私たち教職員一同は全力で努めます。本日学位を取得された諸君が、与えられた新しい環境のなかで大きく発展し、大きな花を咲かされることを期待し、告辞いたします。

平成 21 年 3 月 24 日
香川大学長 一井眞比古